ミオヤの光

奇特の巻

御遺文
奇特
御歌
付録
辨栄聖者御逸事

佛陀五德

大宗教家としての釋尊が現に今念佛三昧を以て彌陀淨滿の靈德と釋尊の三昧中に交感すること日光に反映する淨滿月の如し。故に釋尊の身と心とに彌陀の萬德が顯現す故に釋尊の身心は彌陀萬德の光明に滿たされたり。五德は各方面に現はれたる彌陀の靈德なり。釋尊は自ら大宗教家として、また一切の模範として、念佛三昧を以て彌陀の光明に同化せらるべく教へ玉ひき。心靈五德の中

初、世尊住二奇特法一。（總德）
二、世雄住二諸佛所住一。（感情の安住）
三、世眼住二導師行一。（知力の知見開示）
四、世英住二最勝道一。（意志、道德行爲、人格完成）
五、天尊行二如來德一。（如來光明中生活及行爲）

今日世尊住奇特法

今日とは釋尊が今現に彌陀三昧に入りて直接に彌陀の大靈格に接し大光明に充滿されしこと。今日とは永遠長時に彌陀と離るるなき今日なり。我等が今日彌陀三昧に入つて彌陀に接觸せる同一の今日なり。彌陀は永恒常住の今日なれば何時なりとも彌陀に接觸すれば今日とす。

世尊は一切衆生に超越する獨妙なり。靈德威神不可思議の故に世尊と名づく。また大威力あり大自在者無上の權威にましまして一切天龍八部等の爲に尊崇せらるる故に世尊と云ふ。

世は十方三世あり。本來佛陀は絶對大神靈界の尊靈體、世界萬物に超えて勝れ獨妙なれども世界に嚴臨し玉ふて衆生の爲に出現したまふ。若し唯世界の他の人類と同一の人格ならば人類を指導し人類の光明と成る能はず。獨り高く物表に出でて低き一切衆生を照見し玉ふが故に衆生も其威神力に感じ高く仰ぎ其教化を被むるに至る。

奇特の法とは一切の萬法悉く不思議、世尊は不可思議の權化である。不思議に世に出現し一切衆生を教化して不思議の靈界に歸還したまふ。世尊は神變不思議者なれば種々神變神通奇蹟を示し自在不思議感通力を以て一切の天龍八部乃至衆魔外道及び邪見驕慢の輩をも折伏し降伏し玉ふべし。假令金剛山を移し日月を掩ひ種々の神變奇蹟を現はし玉ふと云ふも是唯衆生攝化の方便にして眞實の奇蹟と云ふに足らず。眞實の不思議とは一切の迷盲罪惡の凡夫を轉じて淸淨の佛子と爲し無常の大火に燒かれる五濁五惡の世界を變じて淸淨常樂の佛界と化する處にあり。

大不思議、奇特の本源

佛陀は大奇特者である此不思議を出現したる本體は更に大不思議者である。そは如何なる者ぞ。即ち宇宙一大神靈態なる眞如の靈藏これなり。天地萬有は悉く一大靈藏

より發現せられ産出せられたる物である。絶對不思議を眞如と云ふ。絶對眞如の自性清淨の靈態から出て來るから如來と名づく。

大不思議は一體なれども三身に分れて來る。今日の此世に現はれたる佛陀世尊は本何れより來りしや。また何の目的ありて出で給ひしやを說明せん。三身とは一に法身二に報身三に應身是である。應身が即ち佛陀釋尊である。

初の法身佛とは宇宙全體を身とする絶對的の世尊にして而も一切奇蹟不思議の淵源である。實は絶對なる法身は時間も空間も超絶して居る故十方とかまた三世とかの區域も分齊もない。然れども其中に時間も空間も悉く存在して居る、其本體である。宗教的に表はす故法身佛と云ふけれども若し之を學語に云はゞ眞如とか又實體とかに呼んで居る。故に眞如と云ひ實體と云ひ宇宙全體を一體と見て名づけたのである。同一の體なれども宗教的に表す故法身また毘盧遮那と號く。法身と云ふ名を解せば法身は宇宙萬有に對して自然の大法則ありて大は天體の有ゆる日月星晨の一定の軌道に秩序整然と循環することから地上の動物や植物などの生成の理に至るまで細大となく悉く自然の法則に整つて居らぬ物は無い。有ゆる萬法の大原則にして宇宙全體を統一して居る本體である故法身と名づくることはビルシャナは梵語にて譯すれば遍一切處と云ふ。宇宙全體に渡れる一切の物質の（地水火風空）と識大との一切の統一的存在を以て身とす。故に宇宙全體がビルシャナ如來と云ふ永遠に活ける如來である。萬有が悉く自然の法則に支配せられて秩序あり條理あるを見れば之を統一攝理の大主權者なくてはならぬ。例へば人爲則の立憲政の國家には人爲の法憲法民法等の一切の法則を以て政治を司るに主權者がありて其統治の下に於て人民間に行はるゝ如く、天則にも主權者がありて萬物の規則の整然たる、天の星辰等の萬古に易らぬ、また火の熱水の潤ふ等の物理にしても眼は視え耳は聽き胃腸等の食物を消化する等の生理にしても古今に其規を變せずして天に行はるゝ實に神聖にして侵すべからずてふ統一者に依て行はるゝ觀あり。世に天命と云ひ天則と云ひ謂ゆる天何と言

んや四時行はれ百物生ず。法の法位に住して世間の相は常住なりと。天地萬物は悉く眞如隨緣の姿、亦法性に本づくと云ふ。是が即ち宗教的に云はゞ法身佛の法則に隨ふと云ふのである。法身佛が一切萬法の主權者にて萬有悉く此一大權威の下に隨順せぬ物はない故に宇宙全一の世尊と爲す。

法身如來の奇特法

一大心靈としての宇宙は實に不思議である。絶對的に奇蹟である。世に不思議と云ひ奇蹟と云ひ、何者か宇宙絶對者の不思議に及ぶものあらん。宇宙の秘藏は一切の不思議の淵源である。絶對者の秘密の內容は吾人の肉眼を以ては迚も窺ふことは出來ぬ。我々は唯宇宙の秘密藏から發現せられたる皮相から天體無數の星宿が羅列し地上に起伏隱顯する動植物等實に千變萬化極りなき顯現の迹を見て實に不思議者の妙用を歎せざるを得ぬ。密藏より發現せられたる自然現象界の舞臺の表面を見ても奇特を感せざるを得ぬ。其內面即ち樂屋の裡は窺ふことは許さぬ。世に謂ゆる造化の妙用と云ひ實に奇妙である。宇宙の謎は容易に解し難い。宇宙の不測に就ては怪力亂神を語らぬてふ孔子も彼は喟然として歎じて、逝く者は夫れ斯の如きか晝夜を捨てずと、又天何をか言はむや四時行はれ百物生ずと、また上天の載は音も無く臭も無しなどと、是等は或物に對して感想の發表ではなからうか。ベーコンが哲學は少し許り學ぶ時は無神論に陷るけれども深く研究するに隨て實に九苞無窮の玄邃莊遠なる人智の著だ微にして數ならぬ無限者に對しては唯畏敬歎服の外なきに至ると。宇宙秘密藏から一切の天地萬物は産出され恰も數多の子供が一人の母の胎內から生産される如くに、太陽も地球も乃至一切の生物も悉く其本源は如來藏より出でたのである。密教に胎藏の大日と云ふも如來藏の事である。亦或學者が宇宙は一の大なる頭腦であると云つて居る。不思議な事は如何に吾人の頭腦は小なりと雖も如來藏てふ宇宙全一の頭腦から産出された一の頭である。此小さな頭腦中にも博聞强記な者には萬卷の書を藏つて居る。又

廣く見聞の一切は悉く印象し把住し記憶して頭腦に藏つてある。又天才の詩人の頭からは李白一斗詩百篇、奇句妙韻無限に頭ひ出して而かも盡きる事がない。況してや世界無量の一切頭腦の一大本體なる宇宙全一の頭腦には過去久遠劫の昔から盡未來際に至るまで一切の現象の森々たる千變萬化の無限の事物を常住不斷に現發して盡きることない。絶對者が常恒不斷に建設し造營し變化し破壞し永劫に盡くることなくまた終る事ない。宇宙大秘藏の不思議なる一切の複雜なる擾々紛々たる千變萬化極りなき萬物に一定不變の條理あり秩序ありて生成し天則の理法を以て一切を統治し侵すべからざる性能の存在するは即ち法身世尊の大權威にして一切萬物の不思議の顯現は是法身奇特の法とこそ云はめ。

報身は宇宙の中心本尊

先に法身佛は宇宙全體を擧げて其體としたまふ故に大虛空法界即永恒に活ける如來と陳べたり。天地萬物の現象界は現象の一皮面に過ぎぬ。其絶對者の內密は現象界が舞臺とすれば裡面の樂屋の裡は凡夫の肉眼を以て窺見ることは出來ぬ。僅か其一分たる吾人の頭腦に於てさへ表面より見れば皮膚等を以て覆はれたる頭骨に過ぎぬけれども、其內面の精神には微妙の觀念及び巧妙なる智慧高尙なる眞理を考察し識鑑する理性等の心理作用に至つては外部よりは窺ふことはできぬ。況んや絶對者の內面秘密藏に於てをや。

却說凡て物には全體には中心あり中心が主宰となりて凡てを統攝す。宇宙全體を法身とし全體の中心を以て一切諸佛萬法を統一する唯一の本尊をば報身如來とす。報身は盧遮那如來とも云はれ、ルシャナとは梵語なので淨滿とも又光明遍照とも譯す。有ゆる煩惱垢穢が淨盡して萬德圓滿して最上位に在ます故に淨滿と名づく。又光明遍照とは法界の中心に在まし慈悲と智慧との光明普ねく十方世界を照して念佛の衆生を攝め取りて淨きに生れ更らしめ玉ふ故に名づく。

全體の中心

元來宗敎は宇宙の全體を如來と仰ぐと共に最も特に宗敎心に大事なるは全體中の中心本尊を認めて之を歸命信賴することである。其中心本尊とは斯樣である。體には中心ありてすべては統一が出來る。其中心と云へば先づ、吾人一個體が小宇宙とすれば此個體に頭と兩手兩足の五體眼耳鼻舌身の五官、內の五臟六腑等各自機能を備へ其掌る所を異にして居る。若し精密に分くれば身體は四百兆の細胞を以て積聚つて居る。各其細胞は別々に活きて居る。して見れば此個體は四百兆の生命總團體である。其總てを統率して其中心の主宰者は自我即ち精神である。此精神が身と心との凡てを統御して居る。自我が一身の中心主權者である。此個體を幾千か聚合した團隊が一家にて之に家長ありて幾個の體のなせる一家を統率する主權者である。一國には皇帝若くは大統領がありて一國民を統御する主權者である。又天體には太陽が中心と爲りて八の惑星其他數多の星宿を統一して居る。自然界に太陽が中心本尊として大威力光明ありて地球等に威力を及ぼして地上の生物を養成する。

宇宙全一絶對の大心靈體に中心本尊なかる可からず。宗敎は宇宙最尊唯一の本尊を信認して之に歸命する處に成立つものである。佛陀が宗敎の敎祖として吾人に敎ゆる如く、自ら至誠深心に宇宙の本尊に信念を献げて其大光明に接觸し玉ふて居る。本尊とは即ち無量光明如來威神光明最尊第一者なり。

如來は心靈界の太陽である。若し物質としての世界に太陽なかりせば地上の一切の生物の生存することは出來ぬ。夫と同じく心靈界に無量光如來が大心靈光明を以て普ねく十方世界の衆生の心念を照して之を攝化し給ふにあらずば一切の衆生の宗敎心を滿足に成就することは出來ぬ。十方に無量の諸佛在まし各其國々に於て衆生を敎化し玉ふも無量光如來は諸佛の中心本尊として一切諸佛は彌陀に統一せらる。而して其國の衆生に彌陀の光明を信念して攝受せらるべき眞理を敎へたまふ。

宗教心とは宇宙の中心たる本尊と衆生小宇宙の中心なる頭腦の奥殿に在ます靈性と關係を爲す處なり。

大宇宙の中心靈と小宇宙の靈性との關係

宗教は宇宙の中心本尊を認めて之に自己の中心精神の凡てを献げて歸命信頼する處にあり。

宇宙の中心本尊は一切萬有最尊最勝至善至美至靈にして太陽の赫々たる如き神靈態の大光明者である。小宇宙なる吾人の個體には此の靈體の光明に接觸し得らるゝ性を具有して居る。然れども精神中最も至精至靈なるは人の頭腦の奥宮に幾重にも蘊れたる中に伏藏せる靈性である。此靈性が大靈性と最親密なる交渉することが宗教の宗とす。この信心とは大靈の本尊の光明と直接接觸して夫れに靈感を得また靈化せらるゝ處にあり。精神に無明煩惱と云ふ垢穢の質があるから如來と接觸出來ぬ。大至靈の光はそれに相應する精神態と成るに非ざれば感ずる事は出來ぬ。華嚴經に人に、眼あり天に日光ありて能く物を視得らるゝ如く、如來の靈光は常に照し玉へども人に信心の眼なきが故に見ることが出來ぬ。

如來の至靈の光は衆生の心の靈性でなくては感見は出來ぬ。例へば天の日光は照輝くとも瓦礫の如き麁質の鑛物に其光輝をとゞめず、若し金剛石や水晶の如きの至密な質には日光は反射す。兩方の質が相應するが故なり。

如來は宇宙の最勝無上の尊體に在ます故に衆生の精神中の奥宮の靈性が開けざれば其光明に接觸する事能はず。然らば如何にせば其光明に接觸すべきぞとなれば是れ念佛三昧である。一心に此の三昧を修すれば如來の靈力に自己の金剛心石が磨かるゝが故に寶石の琢磨したる處に如來の日光は反映す。教祖世尊の寶石に彌陀の日光が反射し、其反映の光が斯世界の衆生に及ぼして居る。教祖は吾人に彌陀の光明に依て我等が靈性を活すべき範を示し給ふた。吾人はいかに些々たる寶石でも念佛三昧にて磨く

時は必ず彌陀の日光が寫映する。

宇宙大中心としての尊靈と小宇宙の吾人の頭腦奥室の尊き靈とは本同性質の故に親密な交渉が出來る。實は其子である我等は法身佛から產出せられたる靈性を本々有て居るけれども、報身如來の光明に磨かざれば靈の親の光明と容るゝことが出來ぬ。宗教心は最も尊き靈である。世に宗教心未發の人は頭腦の靈性が開けぬ故に瓦礫に日光が反映せぬ。又人間已下の動物の頭腦にも如來の靈光を反映すべき靈性は顯はれぬ。宗教心の大靈の日光を反映せぬ無宗教者の頭腦は動物的の方面にのみ發達して居る。自分の心に尊い性が開發せぬ故に天を瞻仰しても、尊靈の日光を尊崇する性がない。大靈の尊き光に我等が心靈は照されて靈の生命として戴く、是れ奇特中の奇特の法なり。

絶對の大靈より出でて本に還る

世界の萬物は其本は皆如來の法身から世界の方面に產出されたので、私等衆生も其分子であるとは已に述べた。衆生の中に人類は最も高等に發達して居る。宗教は人類を本の本覺の如來の御許に還るべき道を教ゆ。然らば本覺の親の在ます處は何れなる哉。先に述べた宇宙の中心本尊の在ます處、釋尊が出世なされたるも實は我等衆生を慈父の許に還るべき誘引に出ましなされたのである。

此經に往昔法藏菩薩が四十八願を建てゝ宇宙間に最上最美の淨土を成就し、其淨土の莊嚴のさまは此經に委しく說明し玉ふ如く、其淨き國が即ち我等の慈父の在ます處そこを一切衆生の本源にして又進み進みたる終局はそこである。經には斯樣な微妙嚴淨な世界は本々は無かりしを法藏菩薩無量の行願の力から感得して成就したと說示し玉へども、其實は一切衆生の大慈の本覺眞如の都にて、成と不成とを離れたる本來無作の靈界眞善微妙の淨界である。されども法藏菩薩が斯の如き大慈父の自然微妙の莊嚴世界の存在を發見することは出來ぬ。大慈父の慈悲は我等迷子の爲に往昔此世に人

類の身を以て應現なされて世界の衆生に順應して無量の苦難より淨土を莊嚴なされしと、子を愛する慈父の慈悲を示しなされた。

奇特中の奇特不思議なるは淨土の靈妙境界である。いかにせば我等は永恒常樂の慈父の御許に還ることが得られるか、慈父の許に還らんには斯樣である。本覺の都に還るに就ては是非報身如來の光明を仰がなければならぬ。其の故は我等衆生は本法身の父より受けたる靈性と云ふ佛に成り得らるゝ性を具へて居る。其れは例へば鷄の卵の如くである。鷄卵はあつても之を孵化せざれば雛となり鷄と成る事は出來ぬ。我等が佛性を溫めて靈き人として玉はるのは報身如來の光明である。如來は光明徧ねく十方世界を照して衆生の信心を開發して靈き生命聖き人と爲したまはんとの親の心は深く深くまします。されども人を如來の慈悲の懷に容られて信念の孵化すべく心行なくてはならぬ。

如來の光明にて衆生の信念開く時は從來の肉の我でなく靈き生命と爲り佛の子と成りて益々慈父の光明中の生活となることが出來る。卵が孵化して雛と成る如く、我等は肉我の皮殼より出でゝ靈の生命と復活するなり。即ち是念佛三昧の妙法である。

如來は我等凡夫無明の心には何れに在ますか見ることが出來ぬ。往昔々々永遠の昔法藏菩薩が宇宙甚深秘密藏を開きて、無量光如來の威神尊嚴相好圓滿光明普ねく十方を照し、無比莊嚴の淨土に在ますことを發見なされて既に十劫の昔、當時の衆生に慈父の御許に還るべき門を開き玉ひし、近くは釋迦牟尼は宇宙秘密藏を開き本覺如來を瞻仰し父子對面して、父の全きが如くに全からしめんとの志願を發し、菩提樹下に於て端坐し三昧に凝神なされた。釋尊は念佛三昧に神を凝して絶對其物の中心眞髓に向つて深く內容に融込で夫からアラ、仙人抔が見て居た非々想天抔も悉く照破して其極が即ち無我の極頂點に入つた。こゝに無明の眠覺めて罪惡の根底を斷て絶對神靈なる盧舍那圓滿（無量光）の暖溫なる慈悲の懷に抱擁され靈的光明に融合して煩惱の殼を破りて正覺の眼が覺見れば無量光の大日輪は無量相好光明普く十方を照し、光明によりて觀る時は、全宇宙は悉く蓮華藏世界即ち極樂の淨土である。此に一切の凡夫の爲には窺ふこと出來ぬ秘密藏の世界は既に開けたり。唯光榮と幸福との輝く處。

釋尊の小我が舍那圓滿の大我の中に融込んで全く無我の絶頂に達觀して見れば絶對無限である。佛陀が無量光に融合したる內觀は一方よりは無我で一面からは大我である。內感の妙味は即ち自受用法樂と云ひて唯如來のみ味ひ玉ふ。

釋尊自ら絶對の最靈福と至高德との合したる無量光にて無量壽なる如來の中にありて初めて無上覺を獲たり。爾來一切衆生を導くに無量光如來に歸命して無量壽國に歸趣すべき眞理を以てす。

釋尊は宇宙の中心本尊絶對的に尊き者を一切衆生に明して、無量光如來威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はずと。是天中の天、世尊なり。

釋尊は無量光如來の人中（地上）の出現なれば地上の世尊。如來の光明は五惡五燒の世界を轉じて五善五妙の淨土と化し、惡の衆生を變じて聖き佛子と化す。是靈妙不思議奇特の法なり。

假のやど

（更生の卷所載は恐くはうつしあやまり）

此世はげにも樂しける、
花よ月よとながめしも、
いつの間にやらうつりゆく、
此世はしばしかりのやど、
さりとはしらでうかゝと、
人は此世に生れ來し、
かりの我身と云ひながら、
かたく認めて大方は、
能く思ひ見よ世の中は、
必ず人に返すなり、

我世とばかり思ひつる、
あつきさむきとかたりしも、
我身のほどぞはかなしな、
いつまでこゝに在りはつぬ、
あだにくらせるあはれさよ、
何ぞ目的と覺ほへず、
心は永に我物と、
まことにさとりし人もなく、
人にかりたる品物は、
天地に借りたる物ならば、

もとの天地に返すべき、
今我この身は誰よりか、
四肢五官をはじめとし、
天地自然の五大なる、
かりたる物にて有りしかば、
自然の規定をしる時は、
まして此身につきそひし、
愚なる身のかなしさは、
しり顔にしてしらぬかな、
朽ちはつぬべき身と財に、
心をなやめ身をいため、
金は山につもりても、
つひに此身の終りには、
全く我身と思ひたる、
斯場に臨んでいかばかり、
我につきそふ物はたゞ、
業の薪木をつもりける。

自業自得

我慾に目しひし輩は、
自ら造りて我と受く、
たま〳〵病にかゝりなば、
また災禍にあふ時は、
己が因果をかへりみず、

自然の道理はあるものぞ、
かりたる物としるやいな、
五臓六腑ことゞく、
地水火風空よりも、
必ずもとに返すべき、
身も我物にあらざれば、
すべての所有に於てをや、
我身はしばしかりの身も、
我慾に目のなき輩は、
他くこともなく貪ぼりて
命をまでもちゞめてよ、
財はくらに満るとも、
つき隨ふもの一もなし、
身をさへもとの土くれに、
悲しみ悔むも甲斐やある、
一生つくりし罪により、
獄火の外になかるべし。

因縁因果

因縁因果の理にくらく、
自業自得とさとりえず、
神や佛の加持祈禱、
星除方角除などと、
かなしい時の神だのみ、

まことの神やみほとけは、
石についても死なじとて、
むごき無常の殺鬼めは、
はげしき業風吹き來り、
奪ふて地獄の火の中に、
苦しみなやみていつの世も、

釋尊出世

無明のやみのいとふかく、
苦界の衆生を憐みて、
三千界にたゞひとり、
はなちて此世を照します、
八相成佛示現して、
たゞみほとけの教のみ、

大みおやの慈悲

法身あみだ如來こそ、
世界一切の萬有は、
衆生の身心ことゞくと、
天地よろづの物をもて、
我ら衆生は法身の、
無情のやみにさまよひて、
子の苦をあはれむ親心、
方便法身を示しては、

眞理の光りましませば、
いかに意氣地を張りかむも、
慈悲もなさけもあらざれば、
あらいたはしやたましひを、
投じられては千萬年、
浮ぶ瀬もなきあはれさよ、

流轉生死の極みなき、
救の道を教へます、
三世了達のみひかりを、
釋迦牟尼如來出で給ひ、
衆生濟度きはみなく、
永恒不動の眞理なり。

天地萬物のミオヤなり、
みてにかゝらぬ物ぞなし、
みなみほとけの分子にて、
我らをはぐみ給ふなり、
み子にはあれば始もなき、
生死に流轉きはなきを、
慈悲のみむねのやる瀬なく、
法藏ぼさつとへりくだり、

いかに迷の我子をば、
五劫に思をこらしては、
功をつもり德をうえて、
六八のちかひは悉く。
今は本願成就して、
極樂淨土を莊嚴し、
尊體無量の相好に、
世界を照して念佛の、
我ら無始よりさまよひて、
みおやのなさけふかければ、
一向みむねにしたがはゞ、

みおやのみもと

みだの淨土に生るれば、
光明とはに輝きて、
八功德池をながむれば、
金の砂はかゞやきて、
蓮の華は咲きにほひ、
四邊の階を下りては、
深淺おもひのまゝにして、
身心ともに淸らかに、
如來說法の會に入れば、
觀音勢至を始めとし、
無比の法味を享受して、
ほさつの相好極みなく、

救ふてだてを得まほしく、
無量永劫難行の、
大悲の誓願建てたまひ、
衆生の爲と聞えける、
十方淨土に超れたる、
萬善萬美をつくしては、
光明遍く十方の、
衆生を攝取し給へり、
生死の海に沈みしも、
むかしの罪を懺悔して、
いかでか救はで置くべきぞ。

無量の功德そなはりて、
樂しさきはまりなかりけり、
七寶をもて莊嚴し、
すめる水にぞ照りとほり、
色光量りもしられ、
水に游げるほさつがた、
涅槃調和は身に適し、
樂しさいはんかたもなし、
みだの寶座のみもとにて、
無量のほさつまかさつと、
ますゝ佛道を增進し、
智慧神通もそなはりて、

みだ同體のさとりを得、
彼處は不老不死のさと、
みだ法王の樂園は、
一度みもとをまよひ出て、
生々世々のうけし苦も、
今度いかなる宿善に、
まねきの聲に驚きて、
慈悲のみもとに歸ること、
みおやのほかに子をすくふ、
子はたゞみおやにたよるより、

衆生濟度きはみなし、
四難八苦の名だになく、
元よりみおやのみやこなり、
六のちまたを經めぐりて、
自らしらで經にけるを、
もよふされてや大みおやの、
無始のまよひの夢さめて、
ひとへにみおやのちからなり、
佛も神もなかるらむ、
外にたのみのみちやある。

辨榮上人御逸事（其四）

五香善光寺　辨誠　輯錄

○

上人曰「十二光を開けば一切を盡す、辨榮は念佛を十二光に開いたがそのアトは汝等の仕事だ、皆して仕舞ふと汝等の仕事がなくなるから」と。

（實に上人全生涯の御使命は如來十二光の上に存し、十二光の眞實義は上人により て始めて顯揚せられたのであると云ふても過言ではあるまい。この十二光には既に先德も御着眼せられ親鸞上人等も和讃して其德を稱揚して居られたが、何れも皆これを只だ客觀的に嘔歌するに止まつてゐた、上人は一々これを吾々の信仰內容に交涉して御說明になり特に終りの三光、難思、無稱、超日月光を喚起、開發、體現の信仰過程の三階位として御細說し給ひしことは實に上人御獨特の御創見で遠く諸師の追從を許るさゞりし御卓見なりと拜察するのである。）

晩秋の一夕上人に隨行して五香に歸院らんとす。荒寥たる高原の夕陽は西に沈まんとして餘光僅かに上人の御頂きを照らす。上人つと御立ち止まり給ひて、汝が心境如何と抑せらる。末弟曰く虛空の如しと答へ參らすや、上人更に曰く、中心はあるかとの給ふに、はいありますと答ふ。上人無語。

○

（人類の起原を論ずるに既成宗敎多く退化的考案をくだして居たやうである、例へば基敎では曾てエデンの樂園に逍遙したりしアダム、イーブが惡魔の誘惑いによりて神の禁果に觸れしことに始まり、佛敎の中でも法華經窮兒の譬へ、或は眞如自性を守らずして隨緣の波（無明）となり、無明によりて人ありと云へるが如きは何れもこれを物語つて居るものであらう、而して此の退化的考察は時々現代の科學に抵觸して相互に應酬し最近もアメリカの敎會ではダアヰンの進化論と衝突して大分波瀾を捲き起した樣に報じて居る。却說）

一日上人に、進化論と光明主義との關係に付て尋ね參らす。

上人曰「昔は鷄より卵が出れたやうに云つて居つたが此頃の學說ではムシロ卵より鷄になつたと云つて居る。」と前提し給ひて、

地球がまだ高等生物を養ふ資が備はらざりし間はアミーバの如き極少の生物を發生したに過ぎなかつた、然しこのアミーバの中にも矢張り法身より受けた伏能があるから、外緣の狀態と共に發達して遂に幾多の健鬪と無數の階級を經て遂に今日の人類となり、人類も原始不完全なる態能より漸次完全に進化して來たので、動物進化の目的は若し宗敎の立場より云はゞ生理機能即ち肉體は手段にして精神の方に永遠不滅なる目的を得るに在るのである、動物中に天性を發して本能的衝動を感し人類に至つて理性と靈性とを開發し得べき可能性を有す、敎育（科學）は理性を開發して事理の是非を判斷せんとするもので宗敎はその奥底に靈性を開發して人類最后の目的たる神と致一せしめんとするものである」。……と。

三

御會通し給ふ。

（これ正に從來の宗敎史上に一大黎明期を劃するもので此處に於て始めて現代の科學とも何等抵觸なく、却つてこれと相提携して更に一歩を進めんとする、謂所科學より宗敎へを如實に御力說し給へる一大御高見と謹んで拜察す。

附記、但し其の御一面には矢張り從來の輪廻說を是認し給へる勿論なり）

○

一日上人に問ふ

「極樂へ往生すれば自己が彌陀になるのでありますか」

上人曰「佛敎徒問にはマ、そんな考へを抱いておる者もあるやうであるが、それは誤りである、ナル程彌陀に攝せられて往生すれば生死にわたらない永遠性とは致一することが出來るがそれは觀音勢至の如き諸佛菩薩としての覺位であつて彌陀の位を奪つて代るのではない、換言せば自已即彌陀ではない、矢張り月としての覺位であつて諸佛を統一し給ふ獨尊は以然として法界宮の中心に在す阿彌陀佛である。

彌陀の位を奪ふといふやうな不遜なことは、宗敎としては決して許るすことは出來ない。」

○

（私に案ず。テロペの固き誓ひが遂にゲッセマネの園に三度までキリストを忘れしことに始まり、キリスト敎では「誓ふことが禁じられて居る」。）

一日某師曰「禮拜儀晨朝の祈りに「我らも完德の鑑たる世尊に倣ひて如何なる境遇にも姿色を換へざることを誓ひ奉つる」と書いてありますが、實際私のやうな劣機の者は到底これを如來へ完全に約束しえられやうとは思はれませぬが、それは妄語の罪にも陷ることでではありませんでしやうか」と尋ね參らす。

上人曰「佛敎の戒法には小乘戒と大乘戒との二種がありまして小乘戒の方では一度

四　五

犯せば皆な破れて仕舞ふのですが、大乘戒は金剛寶戒と云つて例へば金剛石の一度腹中に入つて遂に消滅せざるが如く、一得永不失とて一度受けた戒法は途中たとへ過つて犯されたとしてもその戒體は決して滅失するものではなくやがてそれが薫發されて行くのであります。故に全受分持とて受ける時は眞心に全部受けて其の分に應じて保つて行くのであります。勿論はじめからこれを豫期してどうでもよいと云つた樣な考へでは駄目です」と。

○

某師の曰く「眞宗の絶對他力と云ふことはどうしても合點が行きませんが」

上人曰「私は今善光寺に居ると云へると同時にまた五香に居ると事ふことも出來ます——乃至共にこれ眞如の力です。」

○

上人に隨行しはんべりし頃、往々その寸閑を惜ませ給ふて御讀書し給へるを拜見す。

一日上人に問ふ「御上人でもまだ御讀書の必要がありますか」

上人曰「證入るには別に何もいらぬ。然し一冊の書でも相當心血がそゝがれて居るものであるから、見ておいても差し支へはない」と。

○

上人曰「肉眼では未來はワカラヌが道理の方より見る時はワカル。人が種子に附けられたる札を見て、まだその枝葉はみへぬが、道理の方より發芽期等一切を知るやうなものだ。」

○

上人曰「本源(おほもと)の慈父の許に還へる心の起ることを歸依佛と云ふ。それに付て還へるべき理を法と云ふ、親が子を思ひ、子が親を戀ふるところが法なり、南無阿彌陀佛の一念なり、此の一念の中に萬法備はれり(十二光の德)。そのことを人々に紹介するが

信(たのむ)なり」と。

○

上人曰「關東地方は第二期の宗教が入つて居ないので、どうも眞實の信仰が少ないがこれから發展して行く勢いがある。關西は第二期の宗教が旺盛であつたから一般的に宗教心に富んで居る、が然し今日ではもはや微(かす)がはへて將來發展の元氣に乏しい」と傍に聞ける某氏の曰く「では、その微だけを取り除けば良いのですか」と尋ねけるに上人の曰く「否、全部炊(だ)き直した方が良いのです」との給ひき。

○

上人曰「禪宗は墨繪の如し、その質を貴ぶ。

淨土宗は錦繪の如し、その美を喜ぶ」。

○

又曰「眞宗の信仰は恰も太陽のもとにひれ伏してその慈光を感謝するが如く、光明主義は感謝しつゝも太陽を仰がんとするのである」。

○

大正八年の末つかた、上人松戸町某家へ御來錫し玉へることありき。時正に默々永年の御忍鬪は遂に全國に向つて光明主義を宣言し、そが御完成の途に立たせ玉はんとする折なりければ、一入と御決心の程こそ拜察し奉れり。

適々其家に一壯年あり、談その事に及ぶや扼腕して上人に必らずこのことを成就せしめ玉はんことを聲援す。

上人曰「はい、然しその結果の如何は一に、如來任せでどうなるかわかりません」と。

某、その語尾を詰りとらへて曰「そんな出來るか出來ないかわからんなどゝ云ふやうなアヤフヤなことでは駄目です、必つと出來ると決心してやらねば駄目です」と肉迫しけれど、上人依然として此の言葉を肯んじ玉はざりき。

○

明治四十四年は恰も明照大師の御七百年忌に相當しければ美々しき法要は諸寺院に嚴修せられ、僧俗共にその香に醉はんとしぬ。

上人書を寄せての玉はく「――中略、然れども眞實世を救ふの一心なく只虛榮を樂として明照大師の號を引擔ぎまはりて、御祭り主義は還つて財產家の息が妓者をあげて一時の榮花の夢に祖先傳來の產を蕩盡すると恰も類似の點なきにあらざるべし、七重八重花はあれども山吹の實の一だになきぞかなしき。とは古人の歌、眞實、實のある宗敎家こそ眞實に世を救ふなれ。

○

上人は其御主義宣傳の形式として、一面に於て在俗の姿、昔の啓之助に立ち還りて進まんとし玉へると同時に、亦一面に於ては從來傳承し來れる寺院僧侶の中に、魏然と立ちて之れを統御指導して行かれんとせられた。そしての玉ふやう「折角できて居る大きな店を使用はないのは誠に不經濟のことである」と。

○

上人一日座談の折、某師をかへり見ての玉ふやう、「世の中には隨分妙なことがありますネエ、自分はお念佛が嫌ひであり乍ら、人々に對つては頻りにお念佛せよお念佛せよと勸める者がありますネエ」。

○

上人曰「甘いから食べるのではない、食べるから甘いのだ。」

上人曰「御別時に出るやうになれば、もうしめたものだ。」

上人曰「御別時道樂になつては駄目だ。」

○

上人曰「世間ではよく宗派の如何を云々するが、寧ろ佛敎徒であると云つた方が良

い。また、五重相傳と云ふこともあれはたゞ淨土宗に限ることであるから、廣く佛敎上より云へば授戒の方が契當だ。」と仰せられた。

（附記、上人御晩年處々に於て光明主義に依る授戒會を御開筵遊されたること數々ありき。）

○

大正八年十二月一日より五日まで五日間、五香善光寺に於て授戒會を營み玉ひぬ。想へば之れぞや遂に善光寺最後の御敎筵とはなりにけるなり。參加するもの一百五十有餘名、日毎のお法訓も一としほ有りがたく心に泌み打ちたゝく念佛の聲もいとゞ勇猛に勵みける。

ある日お法語の一節に戒め玉ふやう。

――――、生死事大無常迅速、諸子自ら速かに念佛努力して如來光中に復活せねばならぬ、然るに悲しい哉や從來幾多の寺院僧侶は多く形式にのみ墮し去らんとして美々しき袈裟衣にのみ衆生の渴仰を求めんとし、或は讀經の長短に布施の多寡を逐はんとすることにのみ汲々として、其の最も緊要事たる、卽ち今現にこゝに在して光明遍ねく十方界を照らし迷へる子等が一日も早く頭を廻らして我が攝取の中に安住せんとするの日を待ち詫び玉ひつゝある、たゞひとりなる天の大ミオヤの慈悲念願を敎示して生ける衆生の心靈を更生せしめんとするの赤誠なし、――中略、また諸子も此度と云ふこのたびは是非ともよく、確と聽かねばなりませぬ。ヨク世間では自分の家には財產もあるから、さう生きておるうちから信心や念佛せずとも死んでから良い坊さんを賴んで立派な葬式をやつて貰ふことが出來るからなどゝ、自分の死生問題を何か餘處ごとのやうに考へておる方々もあるやうですが、それこそ實に大へんな了簡違ひであります。此身今生に向つて度せずんば更に何れの生に向つて度せんやで諸子の往生復活は諸子自らの努力策勵に俟たなければなりませぬ、譬へば、今私がお腹が空いて居るのは皆さんがいくら代つて食べて下さつたとて、この私の腹は決して飽滿する

ものでありませぬ――下略」

と、日頃にもまさせてそのお眉宇の邊ひとしほの慈悲に輝き玉ひつ、慈父が赤子等を思ひ玉ふ懇々たる御遺訓は子等が耳底に今尚涙新たなり。

大正十五年五月廿五日印刷
同　廿五日發行
誌代年七冊一圓二十錢（郵税共）
年十二冊二圓（郵税共）
編輯兼發行人　山崎辨成
印刷人　東京市小石川區茗荷谷町九八　小林七太郎
發行所　東京市小石川區水道端二ノ四四　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番